

星純子著『現代台湾コミュニティ運動の地域社会学 高雄県美濃鎮における社会運動，民主化，社区総体 营造』

著者	中澤 秀雄
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	55
号	1
ページ	142-145
発行年	2014-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006931

星純子著

『現代台湾コミュニティ運動の地域社会学——高雄県美濃鎮における社会運動、民主化、社区総体营造——』

御茶の水書房 2013年 xi+301ページ

なか ざわ ひで お
中 澤 秀 雄

新しい分野と新しいアプローチを切り開いた本である。濃密な文脈で埋め尽くされ読み取りにくい本にみえるが、台湾コミュニティ史と台湾政治に関する多面的な入門書として実是有用である。もともと版元は、玄人筋には読み継がれるが商業的には成功しない本を得意としているから、これでよいのだろう。埋め尽くされている固有名詞の行間や人物間のリンクを一つひとつ理解していくことで認識利得があるような本でもある。蛇足であるが、評者自身も日本の原発ローカルレジームを対象に、関係者を実名で登場させる似たようなアプローチの書籍を9年前に上梓し、固有名詞が多すぎて関係を読み取るのが大変だと評されたことがある（中澤秀雄『住民投票運動とローカルレジーム——新潟県巻町と根源的民主主義の細道、1994-2004——』ハーベスト社、2005年）。しかし、登場する本人たちに納得してもらうためにも、ストーリーを単純化させるわけにはいけないので、ポピュラリティを獲得できないというデメリットは受忍するしかないとは私は考えている。いずれにせよ評者は2回読み直して本書全体の主張や構成を少し理解できたような気がしているが、それでも誤読はあると思うので、それは機会あるときに著者から訂正いただければと思う。

さて本書の章立ては次のとおりである。

序 章 本書の課題

第1章 台湾社会運動の概観

第2章 美濃鎮という「環境」——戦後台湾地域政治の磁場と地域社会——

第3章 地域社会における社会運動——サブ政治

とローカルレジームのあいだ——

第4章 社区総体营造と社会運動——コミュニティ運動の派生と変容——

第5章 コミュニティ運動の再帰的政治参加——地域政治とサブ政治の結節点——

終 章 台湾コミュニティ運動と地域政治——台湾地域社会学の成立に向けて——

本書は目次からも読み取れるように、著者が台湾南部高雄県的美濃鎮（現在は高雄市に編入）に長期にわたり腰を据えて地元の人々からも「スパイみたいだ」（iiiページ）と評されつつ、ダム反対運動および台湾版「まちづくり」（社区総体营造）運動に至る地域社会運動と地域内諸主体の関係性について、長期の参与観察を行った成果である。

本書が行った方法論的挑戦は、日本地域社会学の成果、方法を台湾に導入するということである。国外社会にこのような適用を行った例は少なく、その意義を高く評価したい。横のものを縦にする伝統芸能を越えて、縦のものを縦のものに適用する時代への糸口をつくったわけである。台湾を含む東アジアから、日本の歴史的経験を学ぶためやってくる留学生は多い。そのようなニーズに対して、本書が試みた手法は有効であり、さまざまなジャンルでこの種の知見が積み重ねられる必要があろう。漢字文化圏および官主導型公共性を共有する社会として日本と比較の土俵を共有しやすい。実際日本と共通する要素——農業・農業団体の位置づけ、地域社会にとって中央政府の補助金等の政策資源がもつ意味合い、欧米人類学者の業績の位置づけ、地域開発政策の影響、上からの都市計画体系等——を多く確認できて興味深かった。「近代化による開発計画の巨大化に伴い、法律や都市計画の面でサブ政治の閉鎖化が進行するという点で日本と類似している」（123ページ）というように著者自身による比較の視点もところどころでみられる。一方では台湾語にいう「本土化」は「台湾（文化への実体）化」のことであるなど、漢字文化圏であるからこそ相違点に注意が必要なものも多く、このあたりも台湾専門家の仕事が必要な部分だ（著者の責任ではないのだが、丁寧に読まないで混乱することも多く、このあたり日本語読者をうまく導く工夫が台湾研究業界で案出されるとよいと思う）。

さらに本書が切り開いた新しい分野とは、台湾民主化に伴う地域社会での社会運動の戦略変化、また李登輝政権下で導入された「社区総体营造」政策（著者が明らかにするように、これは1960年代以降のコミュニティ政策としての社会発展政策とは根本的に異なる）が地域にもたらしたダイナミズムの丁寧な分析である（台湾研究に明るくない評者の勘違いかもしれないが、この政策の内実を明らかにした日本語の仕事は本書が初めてではないか。第5章で紹介される台湾版まちづくり運動の内実は、それ自体日本のまちづくり業界にも大きな示唆となっている）。海外事例を日本語で紹介する伝統は長い、地域のガバナンス構造に丁寧に照射し、単なる政策の紹介にとどまらず関係主体のダイナミズムを明らかにする仕事は決して多くない。現地語の習熟、長期にわたる信頼関係構築とインタビュー、日本とは異なった文脈において勘所を把握する修練などが必要になるためだ。いわば人類学的な執念とセンスが問われるのだが、日本ではこの種の学問的訓練とアウトプットへの評価が正当ではない。それゆえ逆に文脈を無視して、木に竹を接ぐように海外政策を導入してしまう誤りがいまだに多くみられるわけで、著者のような仕事をもっと評価されるアカデミズムになってほしい。

さて台湾を理解するためには非常に多くの社会的亀裂を把握し追究する必要がある。外省人と本省人、客家や少数民族など民族集団間の関係、民進党と院外勢力、社会運動との関係（美濃の場合は、有名な貢寮等の事例とは異なるようだ）、国民党「党务系統」と「地方派」との関係、地域社会における権力構造や関係団体、文化人集団・若手高学歴層の地域社会での位置づけ、などなど。これは地政学的交差点に位置する台湾がたどった複雑な歴史に由来する分、専門家による解説を必要とするが、第1～2章はそのような入門としての世界観を与えてくれる。台湾についての知識をほとんどもない評者にとっては勉強になる章であったし、多少台湾のことを知っている読者にとっても、社会運動史の視点から台湾史を俯瞰する作業には価値があるのではない。台湾社会運動の大きな特徴（そして担い手にとっての困難）は、権威主義時代から「美麗島事件」という弾圧を経験したあと、民主化へのモメンタムによって政府も譲歩せざるを得ないパワーを示

した時代、そして民進党・院外勢力イコール社会運動とは見なせなくなった21世紀以後と、圧縮された段階的發展を示したことである。つまり中央政治変動によって、美濃鎮のような地域レベルであっても運動セクターの基底構造が大きく変容し、そのたびに新たな地域政治ダイナミズム、亀裂、レパトリーが生み出されていく（それゆえ戦略の立て方や連帯の作り方が難しい）。また第2章では美濃鎮という「台湾客家文化の箱庭」とも称される地域の特性についても解説される。「グレーゾーンなき日常的对抗関係」「内向きの視線」など、台湾他地域でも観察されるとはいえ美濃の社会構造に照準しながら解説される地域社会の独特の力学が、第3～4章で解説される社会運動の展開に大きな影響を与えることが納得できる。第2章で行われている解きほぐし作業は台湾版の地域権力構造分析（の序説）であるといえる。

第3章では、最終的に中止されることになったダム建設計画に対する美濃の反対運動の組織化過程が分析される。運動体として作られた「協進会」は、若手が年長者を前面に立てる戦略をとり、また民主化と呼応したローカルレジームおよび政治家の変化もあって、ダムに対する地域の世論を正反対に変化させることに成功した。この転換にあたっては大学教授などの提供するエコロジー言説や、近代化が一定程度進行したあとに登場した、台湾文化の振興・保全という新しい潮流に棹さした、景観保存言説が力をもった。こうして美濃鎮のコミュニティ運動は「農村の衰退に対する危機感と民主化の進行」に「共振」し（111ページ）、中選挙区制下で送り出した地元政治家によって導入される中央政府資源を利用して、客家文化をショーアップする方向へと展開していく。すなわち台湾他地域でも盛んになった地域文化史の再発見、実体化運動であり、中央政府がこの風潮に呼応して展開した「社区総体营造」政策である。そのダイナミズムを分析しているのが第4～5章である。

この「台湾文化の実体化政策」は「国民党が民進党のアジェンダを横取りする形で始まったが、勃興する社会運動団体の急進化や民進党への傾斜を防ぐため、既存の地域政治アクターではなく台湾文化に詳しい社会運動団体にこれを担わせた」（159ページ）。このような意図を知りつつも美濃では、ダム

反対運動で年長者を押し立てて計画中止という結果を獲得しながらも薄給や正当な位置づけを得られないことに不満をもっていた高学歴の若手層が、この政策によって働き場所を得て、「～文史工作室」等として積極的に景観保全やコミュニティ史再発見の動きに身を投じていくことになる。ここにおいて中央政府にも評価される知的資本をもつ社会運動は、さまざまなプロジェクトを受託して制度化していく。しかし他方では、旧来の地域社会秩序に介入しきれず、むしろ「旗美社区大学」のように知識人ネットワークの自己変革を目的とするようになったり、「南洋台湾姉妹会」のように地域政治からは距離を置くようになったりもする。このあたりのダイナミズムを、ブルデューを参照して「卓越化」（運動の担い手たる高学歴若者層が上品さや学術的言説・知見を駆使し農会や鎮に依拠する地域社会の旧来層とは区別される存在となっていく）と呼ぶのは興味深かった。「協進会は地域政治アクターの統制のきかない県政府や中央政府からの資金を得て、またそれらのアクターが解しない高度な文化や技術に関する言説を展開することで、地域社会から卓越化した」（204ページ）。ただし一方で第5章では、こうして卓越化した運動が、社区総体营造の結果として景観計画・建築に関与することから、旧来の地域社会の担い手層と衝突し、ときには新たに連携して、地域政治に再介入するとともに、中央政府への政策提言を試みる（もっとも本章が描いている時代においては、それは不首尾に終わっている）という「二つの政治への挑戦」を行っていく様子が分析される。これは同じ「卓越化」という用語を用いてもブルデュー理論の含意とは異なる結果である。この一見矛盾する「再帰的政治化」が、台湾全土に適用できるのか、このダイナミズムは単に景観計画やリーダーの「意気投合」というような、限定された接触点からのみ起きることなのか、その背景にある構造変動はないのか、といった点は、もう少し展開してほしいと感じた。

今の点も含めて批判的なコメントは、決して本書の価値を貶めるものではないが、書評の義務として気になった点を他に2つほど挙げておこう。1点目は、用語系があらかじめ理論的に整理されているとよかったという点である。たとえば第3～4章で頻出する「小さな機会」という術語は本書が下敷きに

している都市レジーム論者C. Stoneが、アトランタ都市政治の分析で多用した"small opportunity"を訳したものである。しかし頻出する割には定義がはっきりせず、訳語の選び方としても違和感があった。たとえばOlsonに始まる集合行為論などを参照しながら、もう少し精緻な分析があればよかった。もっとも、これは社会学者によるものねだりかもしれない。歴史学あるいは人類学的な書物として読めば、過剰な理論化は不要なのかもしれない。

2点目も理論化に関するものだが、今度は地域社会学者としての要望である。美濃鎮は第2章で紹介されているように、農業生産力が高いにもかかわらず政府の工業重視政策によって割を食った地域であり、それゆえ農民は家族親族ネットワークのうち何人かに高等教育を施してリスクヘッジする戦略をとった（「博士の村」といわれているようであり、実際本書でも「博士学人協会」という地元民から敬して遠ざけられている組織が紹介されている）。この人的資本や客家文化という資源が「社区総体营造」の文化戦略を演出していく上で大きな力になったという側面があるから、美濃での知見がそのまま台湾全土にぴったり当てはまるわけではないだろう（「美濃鎮の例は、社区総体营造とそれを請け負う社会運動団体が存在するという点で、そして社会運動団体と地域政治の様相という分析軸が適用しうるという点で台湾を代表しうる」[244ページ]）といわれているのだが、これは一種の理念型として機能するという意味だろう。理念型を用いた類型化は必要と思われる。本書が扱った事例のどの側面、どの要素が普遍化可能なのかという議論がなされると、なおよかったと思う。この点、第3章のまとめで中央政府から下りてくる政策に対する対応として以下のように対比されているのは興味深かった。「淡水は分裂的な地方派レジーム下で、社区総体营造を「地方派系の政治アクターが担ったため、対抗する地方派系の抵抗でその政策が頓挫した」。一方、林辺では「社区総体营造の実行を通じて、部分的にせよ地域社会を覆うグレーゾーンなき日常的対抗関係を越えた信頼ネットワークができあがった」。そして美濃では「支持政党や地方派系に関係なく単一議題ごとに支持を問う兆し」ができていて、美濃ダム反対運動はこれに乗じた。地域社会学者としては、このような類型化をより理論化してもらい、対象地

域が台湾全土の地理的・歴史的構造においてどの場所に位置づけられるのか示してもらえると、理解がより深まったのではないかという気がする。

著者は台湾政治研究の泰斗である若林正丈研究室のみならず、環境社会学の拠点である法政大学サステナビリティ研究機構など多様な実証道場で経験を積んだ。日本が戦前から積み重ねてきた、地域社会を這いずり回る実証研究の伝統が若手研究者の成果

として結実する流れが定着しつつある。著者が日本で奉職した茨城大学そばの常陸太田市など、次なる「スパイ」の対象もすでに確保されているようだ。広い比較の視野をもちながら展開されるだろう次作を楽しみに待ちたい。

(中央大学法学部教授)